

# ばつくとらびすど その四四

## 近江商人藤野家と網走

『網走市史』(上巻一九五八年、下巻一九七一年)に多くの頁を割かれている近江商人がいます。それは藤野四郎兵衛家です。豊郷町にある又十屋敷豊会館といえは分かる人もいるかもしれませんが。しかし、事業体としての藤野四郎兵衛家は明治一六年(一八八三)には実質的に大阪に移転し、藤野家の邸宅も昭和初期には無住となり豊郷村の村有財産となり、今日の豊会館となりました。そのため、藤野家は滋賀県の人びとにさえあまり馴染みがない近江商人かもしれません。

蝦夷地に渡った近江商人といえは、岡田彌三右衛門家や西川伝右衛門家が有名ですが、藤野四郎兵衛家も天保期の松前において有数の商家のひとつに数えられていました。藤野家と蝦夷地とのつながりは、岡田家や西川家よりも遅く一八世紀終わりに始まります。第四代四郎兵衛の次男喜兵衛が薩摩村(現滋賀県彦根市)から松前の地に渡っていた宮川清右衛門の萬屋に奉公に出たことに始まります。喜兵衛はその後、寛政一二年(一八〇〇)に柏屋を屋号とし又十を店印として独立します。その事業は、喜兵衛の男子、伯父である第五代四郎兵衛の養子、つまり本家に受けつがれ、蝦夷地進出後、三代目にあたる定次郎が四郎兵衛を襲名したのが慶応二年(一八六六)でした。この三代目のときに明治維

新を迎えることになります。

喜兵衛は独立に際し「東西蝦夷地土産物運輸売買ノ業」としました。「東西蝦夷地土産物」とは鮭、鱈、鱒、昆布などの海産物で、藤野家は蝦夷地において場所請負人として漁業を営み漁獲物を加工するとともに、松前に運ぶという北海道内の輸送とさらに本州、とりわけ大阪に運ぶという回漕業も営みました。これは蝦夷地に進出した近江商人のなかでは特異です。

藤野家よりも早く渡った近江商人たちは、荷所船主とよばれるおもに北陸の船主たち(のちの北前船主)と荷の輸送を契約し、運ばせていたのです。それに対し、藤野家は蝦夷地・松前間、松前・大阪間のいずれも自家の所有船＝手船で運びました。その数は最盛期に二〇艘にも達したと言われています。

「蝦夷地土産物」は蝦夷地から松前もしくは函館を経て日本海沿岸をとおり、瀬戸内海に入り大阪に至るルートをとります。沿岸航路を利用するとはいえ、海難のリスクは常につきまといました。船の安全運航を祈願して、船主たちは神社に船絵馬を奉納しました。藤野家のばあい、その奉納先のひとつが網走神社でした(写真1)。

網走神社の案内板には、「当神社は文化九年近江の人藤野四郎兵衛が網走川口に小祠を建て漁場鎮護の為に奉斎せるを以て創祀とす。」とあります。そうして創祀された神社は移転され、現在の地には明治四一年(一九〇八)にあらたに社殿が造営されました。柏屋が船絵馬をいつ奉納したのかは定かではありませんが、

現在、一、二面の船絵馬は、神社近くの網走市立郷土博物館に展示されています。また、現在の社殿のちかくには、社務所として利用されている建物（写真2）があります。これは、もともと藤野家の邸宅の迎賓館だったと言われています。

柏屋藤野家と網走とのつながりはこれに留まりません。明治二六年（一八九三）には現在の網走市鱒浦に牧場を開設し、その後、徐々に拡張し、濤沸湖付近にまで広大な牧場地を有するに至ります。

網走神社創祀一〇〇年にあたる大正二年（一九一三）には、藤野家は網走百年祭を執行しました。つまり網走は藤野家とともにあったと言えます。とはいえそのころには、一〇〇年の栄華が終わりを迎えていました。幕末に家督を継いだ四郎兵衛は、明治四三年（一九一〇）に没します。その子がまだ幼いこともあってか、大正五年には北海道にあった本支店を廃止し、農牧業以外の全事業を休止、事業整理の段階に入りました。

（経済学部社会システム学科 坂野鉄也）



写真 2 網走神社社務所（旧藤野家迎賓館）



写真 1 網走神社絵馬の案内板